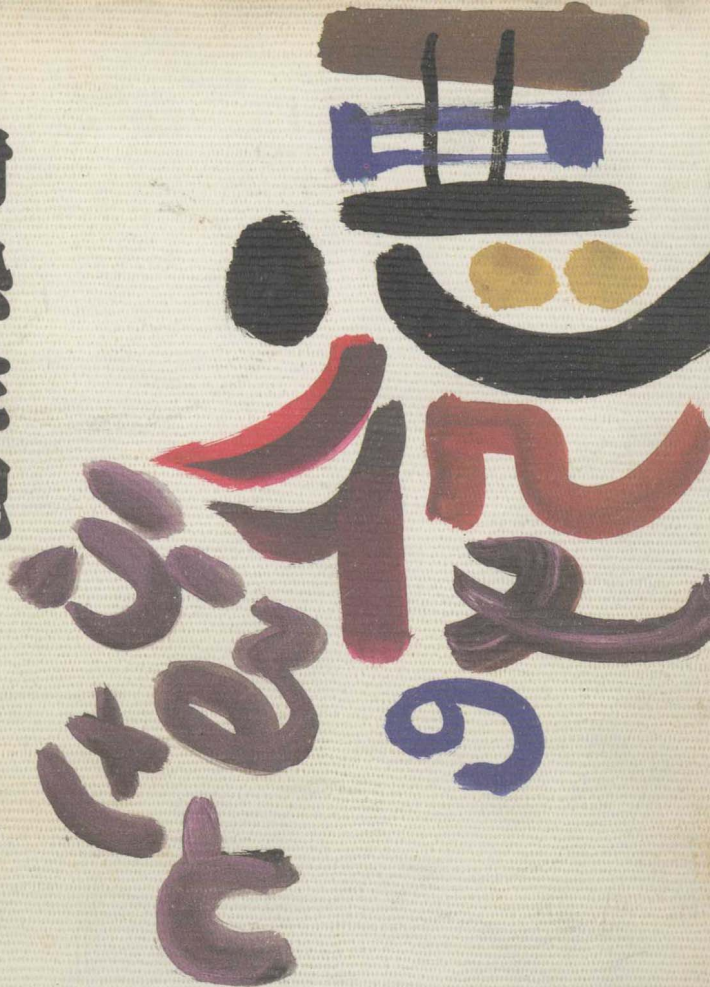


村松友親



村松友親

悪役の
うた

悪役のふるさと

定価はカバーに表示してあります。

第一刷発行 一九九三年六月二十日

著 者 村松友視

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽二―二―二一

出版部 〇三―五三九五―三五〇五

電話 販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り換えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

掲載誌

小説現代 一九九一年一月号〜九三年四月号

悪役のふるさと◎目次

吉良上野介

7

平将門

19

由比正雪

31

黒駒の勝蔵

43

銭屋五兵衛

55

芹沢鴨

67

田沼意次

79

飯岡助五郎

91

平清盛

103

源頼朝

115

弓削道鏡

127

北条政子

139

藤原純友

151

工藤祐経

165

原田甲斐

177

坂崎出羽守

189

大久保利通

201

春日局

213

鳥居耀藏

225

蘇我入鹿

237

後白河法皇

249

明智光秀

261

後醍醐天皇

273

藤原仲麻呂

285

榎本武揚

297

田中角栄

309

装丁／村上みどり

悪役のふるさと

吉良上野介

吉良上野介(一六四一—一七〇二) 江戸時代中期の幕臣。

名は義央。よしかん「よしひさ」とも読む。幕府高家の家柄で、父は足利一族の名門義冬、母は大老酒井忠勝の弟忠吉の娘、妻は米沢藩主上杉定勝の娘。権門と姻戚関係にあるうえ、儀典の職にあたって、有職故実の指南を請う諸大名に尊大の風をもつて接したという。知行地の三河吉良荘では統治に意を用い、善政をしいて、領民からは名君と敬われた。元禄十四年(一七〇二)、赤穂藩主浅野長矩に江戸城内で刃傷を受け、まもなく御役御免、隠居のところを翌年十二月十四日夜半、赤穂浪士に襲われて殺された。

「悪役」にも「ふるさと」がある……これはもう、ごく当り前のことであります。にもかかわらず、何か意表を突かれたような感じがあるのも否めないものであって、「悪役」と「ふるさと」の組合せは、きわめて馴染みにくいミスマッチの匂いを発している。悪役にふるさとなんてあるのだろうかという感覚が、我々の中に棲みついているのは、どうやらたしかなことらしいのだ。

歴史上、なぜか悪役にさせられた人たちがいる。これはおそらく時の権力の都合、あるいは後世の歴史の都合によって価値づけられたのであり、当時の人々の中でそのような認定をされていたかどうかは、はなはだ疑わしい。最近の歴史の中では、中国文化大革命の評価をめぐって、ちよいと時をへだてただけで、善玉と悪役が入れ替ってしまうという例があった。我が国においては、田中角栄なんぞという人のイメージが、その時代の都合によってコロコロ変るといふケースがある。目下、世界的に悪役のレッテルを貼られているのは、イラクのサダム・フセインだ。緻密な分析で世界政治をながめるタイプの人たちが、フセインに関してだけは、まるでプロレスの悪役を見るごとき目を向ける。フセインがクローズ・アップされたときのイメージは、ほとんど狂虎タイガー・ジェット・シンみたいであった。もしかしたら、アメリカという大国の都合で、全世界が右往左往しているという気がしないでもない。

悪役と善玉……これは、複雑な世界を見ると、その難解な構図なりストーリーなりを理解するのに、もつとも便利なモノサシではないだろうか。子供が映画を見ると、「あの人は『いい人』？ それとも『悪い人』？」としつこく大人に聞くのは、それがはつきりしないと物語が分らないからにちがいない。従って、人を善玉と悪役に分けるのは、きわめて幼稚な物の見方ということになるのだが、このアングルもまた捨てたものではないというのが、私なりのこだわりのひとつだ。

物語を際立たせ^{きわだ}分りやすくするために、その時代の都合によって極端な人物像がつけられる。その人物像をつくるエネルギーは、善玉をつくるときよりも、悪役をつくるときにより強く働くにちがいない。ひとつの悪役像といったものが成立するとしたら、そこに人間の強い物語化のエネルギーが働いているわけで、その真っ只中へ分け入るのも面白そうだ。悪役の謎は、その時代のエネルギーの流儀を解く大いなるヒントを^{はち}孕んでいるということが言えそうでもある。

そしてまた現代に生きる私としては、悪役として成立した人物のふるさとを訪ねるという、ひとつの旅のアングルというふうにもとらえたい。悪役のふるさとを訪ねる旅の中で、旅をした私がいったい何を引きずって帰って来るのか。また、旅の前と後^{あと}とで、悪役といわれる人物に対するイメージが、私の中で変るや否やというあたりも、私自身の重大な興味となっている。ま、大雑把^{おおざっぱ}にはそんなところが旅立ち前の私の物腰というわけであり、けっこう武者ぶるいに近いものを感じつつ、第一回目の旅のスタートを待っていたものだ。

さて、暮れといえば「忠臣蔵」というのが、我が国の娯楽世界における定番だ。時代物に対する知識が低下しつくした観のある最近でも、何らかのかたちで「忠臣蔵」が師走のテレビへ顔を出す。これを見るにつけても、まだ「忠臣蔵」は日本人の中で死んではいないという感じだ。たとえば、面長

な大石内蔵助を想像するのは不可能といったぐあいに、内蔵助像は確乎^{かつこ}として固まっている。歌舞伎は別として、映画の内蔵助像としては阪東妻三郎、片岡千恵蔵、長谷川一夫、松本幸四郎などの顔が、私の中には浮んでくるのだが、いわば「そげた貌^{かお}」というのは頭に生じてこない。これは、たとえば由比正雪^{ゆいしょうせつ}などのイメージの幅の広がりさえ思えば、はつきりと絞られた世界だ。つまり、「忠臣蔵」がそれだけ人口に膾炙^{かいしや}したことの証拠であろう。

そして、その「忠臣蔵」の中での極め付の悪役とされているのが、今回の旅のターゲット三州吉良^{きら}の殿様である吉良上野介^{こうすけのすけ}だ。吉良上野介については、大石内蔵助とはちがってイメージの幅が広い。私が見た吉良上野介の印象としては、薄田研二、山形勲、月形竜之介、滝沢修、柳永二郎、それにテレビの伊丹十三などという顔が思い浮ぶ。薄田研二から伊丹十三までの幅を考えても、吉良上野介像はまだまだ流動的だという趣きだ。そのイメージの幅は、おそらくは吉良上野介その人の評価についての幅と、大いに関係しているのではなからうか。

まず、一般的にかの「忠臣蔵」の下敷となった赤穂浪士討入^{あきすた}りが、どのような筋でまとめられているのかを知るため、平凡社の「世界大百科事典」の中の「赤穂浪士討入」の項を引いてみた。

江戸時代、赤穂藩の浪士たちが旧主の仇^{あだ}を討った事件。一七〇一年（元禄十四年三月）、播州赤穂城主浅野長矩^{ながのり}が江戸城中において高家吉良義央^{よしなか}に切りつけた事件に対し、幕府は長矩を切腹させ赤穂藩を取りつぶすという厳罰をもつてのぞんだ。これは長矩の場所をわきまえない行動をとがめたもので、けんかとはみなさなかったから、相手の義央には何の処罰もなく、ただまもなく自ら退役隠居しただけであった。しかし世上にはこの処分の片手おちを非難する声もあり、また城を明け渡

して離散した赤穂藩士らは主君の恨みを忘れず、もと城代家老の大石内蔵助良雄を中心に盟約を結んで時機をまつた。良雄らはまず長矩の弟の大学長広をもり立てて主家を再興しようとはかったが、翌年七月にいたりこの企ても失敗に帰し、復讐の計画を具体化した。十二月十四日夜、大石以下四十六人の同志は江戸本所の吉良邸をおそって復讐をとげ、翌朝芝泉岳寺の長矩の墓前に義央の首をささげたうえ、幕府へ届け出てその処置を待った。幕府は四十六人を細川など四家的大名にあずけ、翌年二月にいたり全員に切腹を命じた（四十六人のほか、討入当夜逃亡した寺坂吉右衛門信行を加えて四十七士ともよぶ）。この事件は江戸時代における敵討の代表的なものとされ、世人の大きな賞賛を集めた。戦国期をへだたること一世紀におよび、武家の風俗のたるみとともに、敵討という戦国的風習が観念的に美化して考えられる傾向のあったこと、および、吉良を一典型とする幕府上層の権勢家に対する反感が武士のみならず庶民の間にもまで底流していたこと、などはとくに大きな感激を呼んだ原因であろう。学者の間には、《義人録》を書いた室鳩巢むろきゅうそうをはじめ、無条件に賛美する者と、荻生徂徠、太宰春台、佐藤直方など批判を加えたものがあり、思想史上の興味ある一題目をなしている。またこの事件を題材とした小説や戯曲は事件直後より数多く作られたが、中でも近松門左衛門の《碁盤太平記》と竹田出雲らの《仮名手本忠臣蔵》とは長く世上にもてはやされた。

これは、きわめて冷静なアウトラインの説明であり、ここからは吉良上野介の悪役性はあまり浮上してこない。ところが同じ事典の「吉良義央」の項には、わずかながら悪役の下地がまぶされているようだ。

吉良義央 一六四一—一七〇二 江戸時代中期の幕臣。三河東条の吉良氏の末で、高家の家柄。父は若狭守義冬、母は大老酒井忠勝の娘。一六五七年（明暦三）従四位下侍従に叙任し、上野介と称し、六八年（寛文八）父の遺領をつぎ吉良庄四千石を知行した。上杉定勝の弟忠吉の娘を妻とし、子の綱憲は養子となつて上杉家をつぐなど、姻戚に名家が多く、天皇の即位や將軍宣下などに際して数度京都に上り、札式に精通して幕府で重んじられたが、ごうまんな性格のため一七〇一年（元禄十四）浅野長矩の傷害にあい、ついに赤穂浪士の討入によつて殺された。養子義周はその際の処置をとがめられて、家は断絶したが、のち分家によつて再興した。

「ごうまんな性格のため」とあるのは、先に引用した項よりもやや下世話な興味に触れてくる記述の仕方だ。ここには、すでに赤穂浪士討入りとの因果関係を、吉良上野介という人物に結びつけようとするアングルが垣間見えるのだ。これが「仮名手本忠臣蔵」となると、吉良上野介こと高師直は、浅野内匠頭こと塩谷判官の妻である顔世御前に横恋慕しているという設定になつてしまふのだ。これはまあ、歌舞伎狂言の長丁場の発端として、人の氣を惹くうまい作りと言えるだろう。だが、吉良上野介側からはまったくもつて迷惑千万ということになるのは当然だ。

浅野と吉良の対決の根本に、「塩」の問題があると指摘する人は多い。浅野の赤穂も吉良もともに塩田を売りものとする土地柄であるというところから、塩をめぐる確執というストーリーが生じてくるのだ。だが、両者の対決の原因を追究するのは、ここにおける私の役ではない。悪役がつくられた過程があるとするならば、イメージを作られた側からの見方はどうなっているのか……吉良ではそのあたりをまず探らねばなるまい。

「とにかく暮れが近づくと、あのお方も忙しいですなあ……」

そんな言葉を、何人もの人から聞いた。一年に一度、暮れになると眠っているところを叩き起され、悪役を演じさせられるのだから可哀そう……そんなニュアンスだった。そこからは、天下の忠臣蔵伝説を引っくり返してやろうというよりも、吉良さまもしんどかろうといった気分を感じた。論争やら自己主張やらには、もう飽きたということだろうか。東京において吉良と赤穂の人々が手打式を行ったという新聞記事があったような気もするし、そろそろ雪解けしてもおかしくない時期がやってきたのかもしれない。

町の観光パンフレットには、「忠臣蔵」で悪役とされる吉良公だが、実際には名君であつたという記述が目立つ。塩田や用排水路を作り、産業・治水に熱心で、農家の赤馬にひよいとまたがり、農民とも親しく接する庶民的な殿様だった……そんなまとめ方だ。なかでも、当時大雨のたびに水害をもたらした地域に、たつたひと晩で築いた百八十メートルにも及ぶ堤防である黄金堤こがねづつみが偉業として有名で、この黄金堤は、いまは桜の名所となっているようだ。

黄金堤へ立って説明書を読んでいるうち、私は奇妙な符合に気づいた。それは、黄金堤がひと晩でつくられたということからの連想だった。

吉良上野介が「畳は取り替えずともよい」と言つたのでそのままにしておく、「勅使を迎えるにあつて畳を替えるは常識」と前日に言われて浅野内匠頭が窮地におちいる。すると、町の畳屋が一致協力してひと晩で畳を新しく替えてしまうのだが、このシーンは、映画やテレビの「忠臣蔵」にはかならず出てきたものだ。畳を一夜にして替える場面はなかなか勇壮で、畳屋の親方などは中村錦之助だってやっていくくらいだから、けっこう花形役者の役どころなのだ。